

# 平成 29 年度教員の教育力向上のための授業改善研修会 発表報告

発表者 今中 厚志

公開授業（分野）：ウェブデザイン II（共通科目／**専門科目**）

対象学年（履修区分）：2 年次（必修／**選択必修**）

公開日時：平成 29 年 10 月 4 日（水）1 限 / 10 月 18 日（水）1 限

## ● 公開した授業の当該科目全体における位置づけ

ウェブデザイン II では、ウェブデザイン I を受講し、ウェブサイトを作成するために基本的な技術と知識を修得した学生を対象に、アプリケーションを利用して、インタラクティブ性を備えたウェブサイトの制作に必要な知識と技術を修得することが主眼に置かれている。

今年度、公開した時限(2 時限分)は、アプリケーションを利用したウェブサイト制作手法の修得部分となり、制作に必要な機能を多く有している統合開発環境アプリケーションとして、実務でも多く用いられている Adobe Dreamweaver CC（以下、DW）の操作の修得が目的の演習となっている。

DW を活用して HTML と CSS を記述し、ウェブサイトの論理構造とレイアウトを構築することが可能である。授業では、学生は、チュートリアルサンプルウェブサイトを作成することで、ウェブデザイン I で修得した技術事項を復習しつつ、アプリケーションの操作に慣れることを目指す。

## ● 公開した授業の進め方や工夫した点

授業前半では、教師の指示に合わせ、配布したチュートリアルに記載された作業を進めていき、後半は、チュートリアルを各自が読みながら、自分自身のペースでサンプルサイトを完成させていくという進行方式を採用した。前半に、アプリケーションの起動、初期設定等、基本機能について、教員とティーチング・アシスタントが学生の進行状況を確認しつつ、一斉に実施する。これにより、最低限の操作については、受講者全員の理解を図ることを目的としている。

チュートリアルで制作するサンプルは、ウェブデザイン I と同じものを採用している。授業は、習熟度のクラスになっていないので、前提授業として設定しているウェブデザイン I を受講した学生であっても、それぞれのコンピュータへの習熟度によって、サンプルを制作する速度や精度が大きく異なっているのが現状である。

一度制作したサンプルを再度制作することで、必要に応じ、ウェブデザイン I で利用した教科書やハンドアウトを確認しながら、復習も兼ねて制作することができるようにしている。また、チュートリアルは、スクリーンショットを多用し、細かい記載を心がけた。また、授業の復習や欠席した際のフォローが必要な場合も、自学自修できるようにチュートリアルを制作した。制作のペースが遅くなってしまう学生がいたとしても、チュートリアルの説明を、順に追っていけば、自力でサンプルのウェブサイトを完成させられるようにしている。

## ● 次年度への改善計画等

発達障害などの申告が出ている学生を含め、文章を読んだり、口頭での説明を聞いたりすること

が苦手な学生が一部存在し、授業への意欲や集中力を高めることが課題である。チュートリアル  
の記述を細かくしたために、文章量が多いことも、一部の受講者には抵抗感があるように見受けられ  
る。授業では、ITセンターのティーチング・アシスタントと一緒に授業を展開するが、集中力の低  
さから、指示内容を聞いていない学生も一部見受けられ、「後から聞けばいい」という意識で臨む学  
生もいるのも現状である。対応すべき人数が多くなると、授業が中断することもある。チュート  
リアルの記述を見直し、図表などをより増やすことで、美術大学の学生に理解しやすいチュートリ  
アルに改良を進めていきたい。動画を取り入れるなど新しい形式のチュートリアルの導入も今後検  
討したいと考えている。

コンピュータに対する習熟度の違いから、授業の目標設定が低めになってしまうことも課題であ  
る。資格取得のための授業であることから、応用的な内容よりも、基本的な内容を確実に修得して  
いくことに目標としているが、コンピュータのリテラシが高く、高度な技術の修得を期待している  
学生から、授業に対する不満の声が出ることもあり、考慮すべき点と考えている。

授業を見学いただいた教育から、チュートリアルの自由度が低く、全員が同じものを制作するの  
は、「飽き」「嫌悪感」を感じる学生がいるのではという指摘もあった。現状のチュートリアルでも、  
配色等で自由に应用できる部分はあるが、学生が、より柔軟性を持ったサンプルを制作できるこ  
とができるようにチュートリアルに用いられているサンプルサイトの再検討や、記述、授業の進行に  
工夫をすることを検討している。サンプルに柔軟性を持たせることにより、リテラシーの高い学生  
にも対応できるようになるのではないかと期待している。

また、教員が、課題の進捗管理役になっており、学生が、ディスプレイの画面ばかり見ているよ  
うに見受けられ、コミュニケーションに工夫があることが望ましいという指摘があった。ウェブサ  
イトに関わる技術要素の説明など、教員の説明部分を増やすことも必要かもしれない。座席の配置  
などを工夫し、教員とスクリーンを見やすくするような空間の設計も考える必要がある。さらに、  
今後は、電子黒板の導入など、よりインタラクティブな授業となるような設備の検討も今後進めて  
いく必要があると考える。

以上

平成 30 年 5 月 14 日 作成